

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 3 日現在

機関番号：32660

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24560790

研究課題名(和文) 日本統治期における台湾・韓国・日本の都市空間形成と居住形態に関する比較研究

研究課題名(英文) A Comparative Study on Formation of Urban Space and Dwelling Pattern in Taiwan, South Korea and Japan under Japanese rule

研究代表者

伊藤 裕久 (ITO, HIROHISA)

東京理科大学・工学部・教授

研究者番号：20183006

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、台湾および韓国の諸都市(宜蘭、嘉義、新竹、北港、木浦)を主な対象として、日本統治期の都市空間形成過程と居住形態(街並、公設市場、宗教施設、土地所有、住居)を文献史料と現地調査によって復原し、相互に比較した。その結果、日本の植民地政策の進展によってもたらされた東アジアにおける都市空間の近代化過程(伝統的都市空間の変容)の特質について解明している。

研究成果の概要(英文)：This study aims to reconstruct the formative process of the urban space and dwelling pattern (townscape, public retail market, religious facility, landholding and housing) under Japanese rule on the main subjects of Taiwanese and South Korean cities (Yilan, Chiayi, Hsinchu and Mokpo) by means of the historical materials and through the survey of the historical townscapes and buildings which remain today. As a result of comparison, it clarifies the characteristics of the modernization (the transformation of traditional urban space) of East Asian cities which was brought about by the progress of the Japanese colonial policy.

研究分野：工学・建築学・歴史意匠

キーワード：日本統治期 都市空間 居住形態 台湾 韓国 日本

1. 研究開始当初の背景

戦前期に日本統治が行われた台湾島(1895年～1945年)および朝鮮半島(1910年～1945年)には、日本による近代都市計画(市区改正)の実施によって成立あるいは大きく発展した都市が多く存在し、戦後期とくに高度成長期以降の改変が著しかった日本と比較すると、むしろ国内よりも多数の近代建築や歴史的街並が現存している。

これらの諸都市に関する建築・都市計画学分野の日本人研究者による研究の視点としては、日本統治期の植民地政策と都市計画の関係性、近代都市計画としての先進性あるいは植民地における近代都市計画理論の早期実現など、日本の近代都市計画史を補強する意味合いから都市計画の内容を分析した研究が多くみられた。すなわち、従来は、日本にとっての意義を指標とした都市計画史研究が主流であったことは否めない。

一方で、近年は台湾・韓国人研究者らによって社会史・経済史・文化史・生活史など多様な観点からの都市分析がなされることで、都市計画(市区改正)によってもたらされた現実の都市空間に展開した社会構造との関係性に注目した実証的な都市史研究もみられるようになってきている。しかし、このような都市社会と都市空間との密接な関係性(社会=空間構造 Socio-Spatial Structure)に注目しながら、都市の実像を丹念に解明していく総合的な都市史研究の方法は、台湾・韓国の諸都市については萌芽的な段階であり、その可能性を探るために、これまで調査研究を実施してきた。

台湾の諸都市に関しては、平成 21～23 年度科学研究費補助金(基盤研究 C)「伝統都市における都市空間の分節構造に関する研究 - 日本と台湾との比較 -」において、鹿港・台北・台中・台南・嘉義・宜蘭等の都市を取り上げ、伝統都市の形成過程と分節構造を解明するために、移民社会の血縁・地縁(同郷)的結合と街区・街路形態および集住形態との関係性、隘門による都市空間の分節、寺廟を核とした分節構造(街区・街路・広場との一体性や祭祀圏の変容)、市場社会の展開による都市空間の分節と統合などの観点から考察を加えた。

韓国の諸都市に関しては、平成 10～12 年度科学研究費補助金(基盤研究 B)「日本と韓国の中・近世における都市空間の比較研究」(代表:玉井哲雄)においてソウルに 20 世紀初期に建設された都市韓屋地区に関する調査研究を行った。その際の課題として、日本統治期の都市空間の形成過程を、日本側からではなく韓国の伝統的な都市空間=社会の近代化から捉え直すことの必要性がある。本研究においても明治 30 年代初期に「居留地」として開港された全羅南道木浦を対象とすることで、双方の居住形態を総体として把握することから近代都市形成過程を再検討している。

なお、木浦に関しては、平成 22 年度に旧居留地の街並景観と歴史的建造物の実測調査を実施し、『韓国・木浦(旧居留地)における近代和風(日式)住宅と町並景観の成立過程に関する研究』(私家坂 2011 年)にまとめた。調査対象が日式建築の多く残る旧居留地(内地人地区)のみであったことから、本研究では、隣接する半島人集住地区に遺された都市韓屋の調査および 1910 年の日韓併合後、内地人・半島人地区を併存させながらひとつの近代都市へと変容していく過程を具体的に解明しようと試みている。

2. 研究の目的

本研究の目的は、第二次世界大戦前の日本統治期において新たに建設あるいは大規模に改造された台湾および韓国の諸都市について、それぞれの都市空間形成過程と日本からの移住民および本島民(台湾)・半島民(韓国)の双方が集住した複合的な居住形態に対して復元的考察を加え、さらに、それらの特徴を内地(日本)の諸都市の状況を踏まえて相互に比較検討することで、日本の植民地政策の進展によってもたらされた東アジアにおける都市空間の近代化過程の特質について具体的に解明することである。とくに、多様な近代都市空間の特質を、一般住民の生活の場となった商業街・市場や宗教・祭祀空間などを積極的に分析対象とすることで、伝統から近代への変容という連続的な視角をもちながら、都市空間や居住形態の特質に迫ることを目的としている。

3. 研究の方法

本研究では、対象都市の都市形成過程と居住形態を解明するために、「台湾総督府公文類纂」等の日本統治期の史資料(図面史料・写真史料・土地史料などを中心に収集)を台湾および韓国の諸機関で収集することで復元的考察を加えるとともに、現状を把握するため、都市・建築空間に関する現地実測調査(街区・街路構成、街並景観、住宅・建築遺構、地域コミュニティ、市場・寺廟空間)を実施し、総合的な分析を行っている。

また方法論としては、拙著「都市空間の分節把握」(吉田伸之・伊藤毅編『伝統都市』4 分節構造、東京大学出版会、2010 年)で伝統都市から近代都市へと変容する都市空間の分節把握の方法論について示したが、同様の方法論を用いて対象諸都市の社会=空間構造の解明を試みている。

とくに、韓国・木浦では居住形態という観点から、日本統治期の「地籍図」や「土地台帳」などを用いることによって、具体的な土地所有形態について考察することが可能となった。このように都市空間を成立させている住民・社会構造の細部にまで踏み込んで具体的な復元的考察を加えることで、よりミクロな建築スケールでの検討を行っている。

4. 研究成果

1)台湾の市区計画と公設市場 - 宜蘭・嘉義・新竹を対象として

清代の城壁都市である宜蘭・新竹・嘉義を取り上げ、日本統治期に建設された現存市場建築の実測調査を実施するとともに、伝統的な都市空間が市区計画によって改変されていく過程で公設市場が果たした役割について復元的考察を加えた(雑誌論文 および ~)

日本統治の初期に建設された宜蘭・新竹の公設市場は、伝統的な街路市場を収用しながら、新たな都市軸を形成するように城内に配置され、堂々とした煉瓦造の様式建築が建設されている。

宜蘭では城外に新設される鉄道駅と公設市場を結ぶ幹線道路が建設され、新竹では、中央の庁署と東門付近に設けられた市場を結ぶ幹線道路が重視されており、いずれも公設市場の建設を通じて伝統的な城壁都市全体を改造しようとする意図が読み取れる。

一方、嘉義では城内の縣署跡を公設市場に転用することで旧来の道路を利用しながら配置されている。市場建築も当初は木造建物の並列配置を基本としていた。このように伝統都市を近代都市へと改造する市区計画において、公設市場の位置づけが都市によって異なっていたことが分かる。

その後、市場建築の建替(RC造化)や街路に面する亭仔脚(アーケード)付貸店舗の建設が行われるが、その改変の状況も都市によって異なり、宜蘭では幹線道路の貫通による南北市場への分離、新竹では、新竹州庁舎の設置に伴う市場街区の表と裏の逆転、嘉義では、街区内の市場売店と街路沿の貸店舗建築の一体化などの特徴が確認できた。

日本や韓国の公設(小売)市場の建設には都市空間全体を大きく改変するような事例は少なく、台湾における日本統治期の公設市場の重要性を指摘することができる。

なお、嘉義では、旧城内に建設された日式住宅の影響を受けた中国人居の街屋遺構について実測調査を行い、和室を併用した台湾街屋の特徴が判明した(雑誌論文)

2)日本統治期における北港朝天宮周辺地域の都市改造

北港(台湾・雲林県)は、媽祖信仰の総本山の役割を担う朝天宮を中心に発展した地方小都市であり、年間数百万人の参詣者が訪れる台湾でも希有な門前町として知られる。

本研究では、実測調査と文献・図面・写真史料を用いて、朝天宮周囲の環状道路と境内整備、廟前の公設市場再編、参道(宮口街)拡幅と街並景観の変容など、伝統都市から近代都市への転換をもたらした日本統治期における都市改造について空間的復原を試みた。(雑誌論文 および ~)

2-1)朝天宮境内の再構築



北港朝天宮と公設市場の復原平面図(1935)

市区改正以前、朝天宮周辺地域は建て詰まった状況であり、十分な広場も設けられていなかった。こうした清代からの高密街区の再編の契機となったのが明治39年(1906)の嘉義大地震である。震災で多大な被害を被った寺廟再建が北港支庁長の呼びかけで開始され、朝天宮は三川殿の左右に龍門・虎門を併設して正面に前埕を設け台湾における媽祖廟の総本山に相応しい壮麗な正面性を獲得した。一方で市区改正による廟周辺道路の整備も開始され、大正9年(1920)には朝天宮境内を取り巻く環状道路が完成する。その詳細が判明した(上図)。これは通常のロータリーの役割に加えて、建詰まった境内空間を一回り拡大することで、龍門・虎門の拡張、後殿・洋樓の建設など寺廟空間の整備を促し、同時に廟周辺に祭祀の場となりうる空地を確保することで現在に引き継がれる祭典時の空間利用もこの頃から整えられている。

2-2)公設市場の再構築

朝天宮周辺では伝統的な市場空間は廟周辺の細街路にも入り込み、雑多な街路市を形成したとみられる。公設市場の建設は、震災復興を梃子としながら、朝天宮に本格的な「廟前市場」を構築するものであった(上図)。また開設当初(S10再建前)の公設市場の建蔽率は21%と小さく、売店建物の周囲や広場に設けられた「仮施設」が重要な役割を担ったことが明らかとなったが、零細商人達の売場として賃料の安い市場内の空地の存在は不可欠であったことが窺われる。

市場建築では、木造洋小屋・中通路型の売店建築が主に採用されたが、宮口街に面してRC造の騎樓式亭仔脚をもつ二階建売店建築が、宮口街の道路拡幅の前年に出現したことが大きな特徴であり、宮口街に近代性を備え

た統一的な参道の街並景観を形成するための出発点が用意されていたと考えられる。

2-3)宮口街の道路拡幅と街並景観の変容

宮口街では、清代には小規模な歩口廊式亭仔脚をもつ平屋建て街屋が大勢を占めたとみられるが、震災後の寺廟整備と参詣客の増加の中で多様な街屋が形成されている。北部では背の高い木造亭仔脚をもつ伝統的街屋が継承され、中部は騎楼式亭仔脚をもつ木造・煉瓦造の二階建て街屋や二階に広いバルコニーをもつ街屋が出現する。周辺部では軒高の低い平屋建て街屋が一般的であった。

こうした多様な街屋形式の混在する街並景観は、道路拡幅によって法令を遵守したRC造の騎楼式亭仔脚をもつ近代的な街並景観へ再構築されていく。実測調査によって、その詳細を検討したが、長大な連棟型街屋による統一的な街並景観を創出した「共同建築」には、元の所有間口を継承したため柱間にばらつきがみられるもの、建物前面の亭仔脚とファサードのみを共同化したもの、新たに計画的な柱間計画を施したものというように、門前町の中心から周辺へと街区毎に異なる地域性を反映した建替状況が確認できた。

以上、市区改正による環状道路の敷設と朝天宮境内の拡張整備、廟前に建設された公設市場とその再編、参道に位置づけられる宮口街の拡幅と騎楼式亭仔脚をもつ連続的な街並景観への建替え、という日本統治期における北港の都市改造の特徴を解明した。

台湾における日本統治期の市区改正では、伝統的な寺廟施設や境内地の廃絶・移転など断絶的な都市改造の側面が強調される。しかし、北港の都市改造は、朝天宮の宗教的な核としての役割また門前町としての都市機能を強化する方向で、震災後の寺廟再建・拡充という地域社会の動向とも連動しながら実施された希有な事例と言える。その結果再構築された朝天宮周辺地域の都市空間は、そうした意味から極めて貴重な近代都市遺産であると考えられる。

3)韓国・木浦旧居留地周辺地区の市街地形成と居住形態

韓国・木浦に関しては、これまでの調査研究が旧居留地（内地人地区）のみであったことから、本研究では、木浦居留地の開設以前から存在した北橋洞の小規模集落を母胎として、木浦開港とともに居留地境界の北側に急速に拡大していった「韓人町」（都市韓屋地区）の集落空間構成と形成プロセスおよび居住形態を検討した（図書、雑誌論文）。

3-1)居留地周辺地域の韓人町の形成と発展

居留地開設以前の伝統的集落が、居留地内の木浦鎮と居留地外の北橋洞に離れて存在し、南北に走る旧務安街道によって結ばれていたことを確認した上で、北橋洞と居留地境界間に新たに形成された竹洞の空間構成と形成過程について土地台帳、地籍図、『務安報牒』附図などの史料をもとに復元的に考察

した。

当該地域では、諭達山麓の地形条件によりつつ新・旧の務安街道を主軸とする自然形成的な街路・水路形態と宅地形状をもつ高密度な集落が形成されている。当初は草葺の韓屋群が多く建設され基本的に韓国人の集住する「韓人町」であったが、日本人との混住がみられ 1910 年日韓併合による木浦府成立までには日本人の土地所有も浸透している。また日本人・韓国人とも不在地主が多数発生しており、借地・借家経営が本格的に進展した。大正初期の地籍図の宅地に明治末期の『務安報牒』附図の住居分布を重ね合わせると、住居の存在しない宅地や一筆の土地に複数の住居を建てた箇所も多く見受けられ、かつての畑作地あるいは宅地の余地などに住居建設が行われ、住居毎に宅地が分割されることで高密度な宅地構成となっていたことが推測される。

2)北橋洞における韓屋地区の集落空間構成と住居集合の展開

戦前期の都市韓屋が多く残され木浦開港以前からの伝統的集落が存在した北橋洞を主な対象として、現状集落調査・家屋実測調査、地籍図、土地・家屋台帳などから集落空間構成の特徴と形成プロセス、とくに近代における宅地開発過程の実態を考察した。

北橋洞の集落空間構成では、海岸線沿いに走る旧務安街道から諭達山へ登る 6 本の山道と 3 本の水路を骨格として、それらを横に繋ぐ生活道路が数多く発生した地域を中心に集落が形成されたことを推定した。また、大正初期の地籍図にみる宅地規模は 30～40 坪程度の小規模宅地が大多数を占め、それらが集中する山道（近代の宅地化）がある一方で、110～120 坪程度の中規模宅地が並ぶ山道（旧集落の中心）もみられた。さらに、旧集落の周辺とみられる高台や街道付近の低地部には 200 坪を超える大規模宅地が分布している。高台の大規模宅地の多くは、畑作地から宅地開発されたものであり、街道沿いの低地部にも近代の有力家による宅地所有が進展したと考えられる。こうした宅地規模格差は、「韓人町」へと変貌した開港後の新たな住民階層の経済格差が都市韓屋地区に顕在化したものと捉えることができる。

また実測調査した住居遺構によって近代における宅地開発の実態をみると、整然としたグリッド状街路と都市韓屋の配列をもつ畑作地の大規模な宅地開発がみられる一方で、不在地主の韓国人による小規模な宅地開発や有力家による宅地集積と借家建設、日本人の借地・借家経営が推測される事例などがみられ、モザイク状に大小様々な宅地開発がなされることで伝統的集落が高密度な都市韓屋地区へと変貌したことが推定される。

3-3)建築遺構からみた近代韓屋の空間構成と建築的特徴

調査家屋の平面類型と建築構成について具体的に分析したが、平面類型は、基本的に

伝統的韓屋のソウル地方型を原形とする「ソウル型」と南部地方（全羅南道）型を原形とする「地域型」に分類できた。また、それぞれについて住居規模の相違から一般型と大規模型に分けることが可能である。

一般的な都市韓屋には、京城・仁川・釜石など半島各地からの木浦移住を示すように、中央の「ソウル型」が早くから移入されたとみられる。同時に、大庁をもたない小規模型を含み、土着的な性格の強い「地域型」が発展し、全体として宅地規模の縮小、高密度にあわせたコンパクトなI字型、L字型、コ字型などの平面構成が定着している。

一方、近代の有力家によって建設された大規模な都市韓屋でも、居留地時代に遡る古い遺構では「ソウル型」の平面形式が採用され、また配置形式も内棟と舎廊棟・門間棟で中庭を囲う伝統的な屋敷構が継承されている。昭和初期になると「地域型」もみられ、配置形式も大規模な内棟のみを単独で建て、観賞用庭園を整える傾向がみられた。

また、平面・架講形式では伝統を継承した都市韓屋独自の発展がみられる一方で、居留地で定着した棧瓦葺の採用（反りの減少）や板床・建具・天井などに日式住宅の影響がみられ、大規模都市韓屋では玄関の設置も確認される。さらに洋風意匠も随所に取り入れられ、韓・日・洋が折衷・融合した都市韓屋へとダイナミックに変化したことが窺われる。

5. 主な発表論文等（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計16件）

伊藤裕久・菊地成朋・箕浦永子・伊藤瑞季「近世近代博多における職住近接と地縁的結合の変容に関する研究」(『住総研研究論文集 41(2014年版)』財住総研, 査読有, 2015年, pp.97-108, http://www.jusoken.or.jp/pdf_paper/2014/1309-0.pdf)

伊藤裕久・吉野菜月「日本統治期における台湾・北港朝天宮周辺地域の都市改造に関する復元的考察」(『日本建築学会計画系論文集』第79巻, 第702号, 査読有, pp.1827-1837, 2014年, <http://doi.org/10.3130/aija.79.1827>)

砂川晴彦・濱定史・伊藤裕久・延圭憲・栢木まどか「日本統治期の韓国・木浦駅周辺地域における日式住宅の成立と都市形成に関する調査研究」(『日本建築学会大会学術講演梗概集(近畿)』建築歴史・意匠, 査読無, 2014年, pp.179-180, <http://ci.nii.ac.jp/naid/110009853002>)

伊藤裕久「神田祭の変遷とコミュニティ」(『都市問題』vol.104, 査読無, 2013年, pp.10~16, https://www.timr.or.jp/cgi-bin/toshi_db.cgi?mode=kangou&ynd=2013.09)

井上恵介・伊藤裕久・栢木まどか「日本統治期における台湾公設市場の空間構成と街区形成過程に関する復元的研究 - 新竹市・宜

蘭市・嘉義市を対象として - 」(『都市計画論文集』Vol.48 No.3, 査読有, 2013年, pp.507~512, <http://doi.org/10.11361/journalcpj.48.507>)

菊地祐希・伊藤裕久・濱定史・延圭憲・栢木まどか・伊藤瑞季・高山信暁「韓国・全羅南道木浦市における韓屋の空間構成に関する研究(1) 調査家屋の住まい方について」(『日本建築学会大会学術講演梗概集(北海道)』歴史意匠, 査読無, 2013年, pp.481-482, <http://ci.nii.ac.jp/naid/110009677652>)

入江沙耶香・伊藤裕久「諏方神社例大祭における祭礼空間の変容過程に関する研究 - 巡行路の変遷を中心に」(『日本建築学会関東支部 2012年度審査付き研究報告集 8』, 査読有, 2013年, pp.145~148, <http://kanto.aij.or.jp/images/pdf/shinsa/shinsa2012.pdf>)

伊藤裕久・吉野菜月・箕浦永子・伊藤瑞季「日本統治期における台湾・北港朝天宮周辺地域の都市改造に関する復元的考察(1) - 市区改正による北港朝天宮境内の変容」(『2012年度日本建築学会関東支部研究報告集』, 査読無, 2013年, pp.717~720, <http://ci.nii.ac.jp/naid/110009770026>)

伊藤裕久・吉野菜月「日本統治期における台湾・北港朝天宮周辺地域の都市改造に関する復元的考察(2) - 北港公設市場の空間構成 - 」(『2012年度日本建築学会関東支部研究報告集』, 査読無, 2013年, pp.721~724, <http://ci.nii.ac.jp/naid/110009770027>)

吉野菜月・伊藤裕久・箕浦永子・呉琮慧・栢木まどか・濱定史・井上恵介・村田真理子・伊藤瑞季「日本統治期における台湾・北港朝天宮周辺地域の都市改造に関する復元的考察(3) - 宮口街の道路拡幅と街並景観の変容 - 」(『2012年度日本建築学会関東支部研究報告集』, 査読無, 2013年, pp.725~728, <http://ci.nii.ac.jp/naid/110009770028>)

濱定史・村田真理子・伊藤裕久・栢木まどか・箕浦永子・呉琮慧・渡辺洋子・野村和真・井上恵介・吉野菜月・伊藤瑞季「日本統治期における台湾・嘉義における台湾街屋の空間構成 - 黄氏住宅を対象として - 」(『2012年度日本建築学会関東支部研究報告集』, 査読無, 2013年, pp.729~732, <http://ci.nii.ac.jp/naid/110009770029>)

森鼻良太・伊藤裕久・栢木まどか「近代における旧浅草区内の寺院境内・墓地の市街化に関する考察」(『日本建築学会大会学術講演梗概集』F2分冊, 査読無, pp.915~916, 2012年, <http://ci.nii.ac.jp/naid/110009650096>)

井上恵介・伊藤裕久・栢木まどか・箕浦永子・吉野菜月・村田真理子・呉琮慧「日本統治期における台湾・宜蘭市公設市場の空間構成と街区形成過程に関する復元的考察」(『日本建築学会大会学術講演梗概集』F2分冊, 査読無, 2012年, p.943~944, <http://ci.nii.ac.jp/naid/110009650110>)

吉野菜月・伊藤裕久・栢木まどか・箕浦永子・井上恵介・村田真理子・呉琮慧「日本統治

期における台湾・嘉義市公設市場の空間構成と街区形成過程に関する復元的考察」(『日本建築学会大会学術講演梗概集』F2 分冊, 査読無, 2012年, pp. 945~946, <http://ci.nii.ac.jp/naid/110009650111>)

村田真理子・伊藤裕久・栢木まどか・箕浦永子・呉琮慧・吉野菜月・井上恵介「日本統治期における台湾嘉義城内の震災復興計画と街区構成の変遷」(『日本建築学会大会学術講演梗概集』F2 分冊, 査読無, 2012年, pp. 947~948 <http://ci.nii.ac.jp/naid/110009650112>)

延圭憲・伊藤裕久・栢木まどか「韓国・木浦における都市形成と町並の変容過程に関する研究」(『日本建築学会大会学術講演梗概集』F2 分冊, 査読無, 2012年, pp. 937~938, <http://ci.nii.ac.jp/naid/110009650107>)

〔学会発表〕(計13件)

○砂川晴彦・瀆定史・伊藤裕久・延圭憲・栢木まどか「日本統治期の韓国・木浦駅周辺地域における日式住宅の成立と都市形成に関する調査研究」(日本建築学会 2014 年度大会, 2014.9.14, 神戸大)

○井上恵介・伊藤裕久・栢木まどか「日本統治期における台湾公設市場の空間構成と街区形成過程に関する復元的研究 - 新竹市・宜蘭市・嘉義市を対象として」(都市計画学会学術論文発表会, 2013.11.10, 法政大)

○菊地祐希・伊藤裕久・瀆定史・延圭憲・栢木まどか・伊藤瑞季・高山信暁「韓国・全羅南道木浦市における韓屋の空間構成に関する研究(1)調査家屋の住まい方について」(日本建築学会 2013 年度大会, 2013.8.31, 北大)

○入江沙耶香・伊藤裕久「諏方神社例大祭における祭礼空間の変容過程に関する研究 - 巡行路の変遷を中心に」(2012 年度日本建築学会関東支部研究発表会, 2013.3.7, 同会館)

○伊藤裕久・吉野菜月・箕浦永子・伊藤瑞季「日本統治期における台湾・北港朝天宮周辺地域の都市改造に関する復元的考察(1)-市区改正による北港朝天宮境内の変容」(2012 年度日本建築学会関東支部研究発表会, 2013.3.7, 同会館)

○伊藤裕久・吉野菜月「日本統治期における台湾・北港朝天宮周辺地域の都市改造に関する復元的考察(2)-北港公設市場の空間構成」(2012 年度日本建築学会関東支部研究発表会, 2013.3.7, 同会館)

○吉野菜月・伊藤裕久・箕浦永子・呉琮慧・栢木まどか・瀆定史・井上恵介・村田真理子・伊藤瑞季「日本統治期における台湾・北港朝天宮周辺地域の都市改造に関する復元的考察(3)-宮口街の道路拡幅と街並景観の変容」(2012 年度日本建築学会関東支部研究発表会, 2013.3.7, 同会館)

○瀆定史・村田真理子・伊藤裕久・栢木まどか・箕浦永子・呉琮慧・渡辺洋子・野村和真・井上恵介・吉野菜月・伊藤瑞季「日本統治期における台湾・嘉義における台湾街屋の空間構成 - 黄氏住宅を対象として」(2012 年度日本建築

学会関東支部研究発表会, 2013.3.7, 同会館)

○森鼻良太・伊藤裕久・栢木まどか「近代における旧浅草区内の寺院境内・墓地の市街化に関する考察」(日本建築学会 2012 年度大会, 2012.9.14, 名大)

○井上恵介・伊藤裕久・栢木まどか・箕浦永子・吉野菜月・村田真理子・呉琮慧「日本統治期における台湾・宜蘭市公設市場の空間構成と街区形成過程に関する復元的考察」(日本建築学会 2012 年度大会, 2012.9.14, 名大)

○吉野菜月・伊藤裕久・栢木まどか・箕浦永子・井上恵介・村田真理子・呉琮慧「日本統治期における台湾・嘉義市公設市場の空間構成と街区形成過程に関する復元的考察」(日本建築学会 2012 年度大会, 2012.9.14, 名大)

○村田真理子・伊藤裕久・栢木まどか・箕浦永子・呉琮慧・吉野菜月・井上恵介「日本統治期における台湾嘉義城内の震災復興計画と街区構成の変遷」(日本建築学会 2012 年度大会, 2012.9.14, 名大)

○延圭憲・伊藤裕久・栢木まどか「韓国・木浦における都市形成と町並の変容過程に関する研究」(日本建築学会 2012 年度大会, 2012.9.14, 名大)

〔図書〕(計2件)

畑野経夫・渡辺洋子・伊藤裕久・北川洋・中村春彦・瀆定史『山梨県の近代和風建築 - 近代和風建築総合調査報告書 -』山梨県教育委員会, 2015年, 総頁187頁

伊藤裕久・栢木まどか・瀆定史・延圭憲・菊地祐希・砂川晴彦『韓国・木浦旧居留地周辺地域の近代市街地形成過程と居住形態に関する研究』東京理科大学工学部伊藤裕久研究室, 2015年, 総頁133頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

伊藤 裕久 (ITO HIROHISA)
東京理科大学・工学部第一部・教授
研究者番号: 20183006

(3) 連携研究者

栢木 まどか (KAYANOKI MADOKA)
東京理科大学・工学部第二部・嘱託准教授
研究者番号: 10453820

箕浦 永子 (MINOURA EIKO)
九州大学大学院・人間環境学研究院・助教
研究者番号: 70567338

瀆 定史 (HAMA SADASHI)
東京理科大学・工学部第一部・助教
研究者番号: 40632477

(4) 研究協力者

延 圭憲 (YEON KOOUHEAN)
東京理科大学・工学研究科・博士課程